

〔論文〕

総合表現におけるグループ活動について —学生のアンケートを中心に—

魚住美智子・村上 佑介・油井 宏隆・山田 千智

1 目的

筆者らは、保育者を目指す大阪城南女子短期大学（以下、「本学」という）2年生の学生を対象に、4名の教員で前期「保育表現技術（総合表現の基礎）」、後期「保育表現技術（総合表現の応用）」の授業内に、グループ形式で総合表現活動（音楽・造形・身体表現）を取り入れている。前期の授業では、実習を見据えて音楽・造形・身体表現を組み合わせ、設定保育（案）を企画し発表させ、後期の授業では、オペレッタ作品を創作し発表させている。

このような授業内でのグループ活動についての学生の意識を探究した先行論文では、グループ活動を充実させることが、オペレッタ作品の質を向上させることが確認できた¹⁾。そして、グループ活動を充実させるための「提案」を論じたが、これらを有効に活用できたのか、「提案」の妥当性などを含め、グループ活動を困難にさせている要因や充実させるための要因などを学生側と教員側の両面から探っていきたいと考える。

本研究は、学生のアンケートをもとに、グループ活動の課題などを探り、充実した活動・授業にするための方策を研究することを目的とした。

2 調査方法

本学の総合保育学科2年生、平成28年度127名、平成29年度116名の前期（6月）・後期（1月）に各1回ずつの計4回、無記名でグループ活動に関するアンケート調査を実施した。回収率は、平成28年度の前期81％・後期85％、平成29年度の前期98％・後期93％であった。

前期のグループ分けは、教員側が5名前後に振り分け、後期は学生の任意とし、原則10名前後のグループ編成としたが、教員が人数調整を行った班もあった。

グループ活動についてのアンケートの質問項目は、以下の11項目である。

- ①グループ活動に取り組んでどうであったか、
- ②グループ活動の際、自らの意見を言うことができたか、
- ③グループ活動の際、全員が情報を共有していたか、
- ④グループ活動の際、皆と仲良くできたか、
- ⑤グループ活動の際、相手の意見を受け入れることができたか、
- ⑥グループ活動の際、相手の考えを理解しようとしたか、
- ⑦グループ活動は、将来のためには必要であると

考えるか、⑧グループ活動は苦手か、⑨グループ活動を充実させるにはどのようなことが必要であるか、⑩グループ活動を充実させるためには、リーダーはどのようなことが必要だと考えるか、⑪グループ活動を充実させるためには、メンバーはどのようなことが必要だと考えるか、以上。

3 調査結果と考察

アンケートの項目ごとに、結果の考察をしていく。

(1) グループ活動に取り組んでどうであったか

この質問に対して、「良かった」「普通」「良くなかった」のいずれかを選択し、その選択理由を記述させた。

表1が示すように、今回の調査で注目すべき点は、「良かった」、「良くなかった」という明確な判断ではなく、「普通」を選択した回答値が50～62%と高かった点である。記述例に「良くも悪くもなかった」という記述があったが、どちらとも言えない、判断に迷ったということで「普通」を選択したと考える。また、活動に取り組む意欲の高低や満足度・充実度の有無も「普通」の選択材料になったと考える。

表1 「グループ活動に取り組んでどうであったか」の結果

(単位：名)

項目/平成年・期	28年・前期	28年・後期	29年・前期	29年・後期
良かった	29	35	25	29
普通	56	55	71	56
良くなかった	18	18	18	23

また、平成28・29年度、前期・後期の「良かった」と「良くなかった」の回答値を比較すると「良かった」の回答値が21～32%、「良くなかった」の回答値が15～21%であり、どちらの年度でも後期の方が僅かであるが「良かった」の回答値が高かった。具体的な記述例として「知らない人が多すぎる。コミュニケーションが取れない」(前期)、「仲良い子と出来たし、自分たちでグループなど全て決められたから」(後期)とあり、後期の方が「良かった」の回答値が僅かながら高かったのは、グループの決め方が影響しているのではないだろうか。その他に、後期に「良かった」の回答値が高い要因として考えられるのは、後期の活動は前期より活動期間が長く課題に取り組む時間がある程度確保できたこと、事前指導での作品鑑賞の機会があり、目標へのイメージを持ちやすく、成果が分かりやすかったことなどである。それらは、「充実感」「達成感」「学び」などの記述例からも推測することができる。

「普通」と回答した学生の記述例の中には、「良かった」や「良くなかった」の両方に当てはまる

記述がみられた。これらの記述例を「肯定的内容（良かった）」、「否定的内容（良くなかった）」、に分類をした結果、78～86%が「否定的」な記述で、「肯定的」な記述は13～21%であり、前期の活動より、後期の活動の方が「否定的」な記述が多かった。「否定的」な記述例として、「やっている人、やっていない人がいる」(前期) など非協力的であることや、団結力の欠如を挙げている記述が多かった。また、前期は教員主導でグループ分けをしたため、「クラスの違う子とするのが少し嫌だった」(前期) という記述もあった。また、後期は学生が主体的にグループを決めたのにも関わらず、「友だちの嫌なところが目についてしまう」(後期) など、日頃、表に出てこない交友関係の実態に関する記述がみられた。

これらの結果から、グループ活動の取り組みに関して、「良くなかった」と感じた学生の方が、多数を占めていたと考えられる。

次に、「良かった」の記述例として、「意見を出し合って決めたので、スムーズに行った。各自持ち帰ったり、みんなの協力性があったから上手くいった」(前期)、「良い経験になったから」(前期)、「いろいろな立場の人の気持ちがあったから。コミュニケーションの大切さを改めて思った」(後期)、「達成感があった」(後期) など、の記述から目標に向かって、コミュニケーションを取りながら、皆で協力することの重要性や充実感、達成感を実感したことが窺える。更に、グループ活動での創作・制作を通して、「自分では考えつかないアイデアを学べた」(前期)、「グループで活動することの大変さや工夫を自分たちで考えられて勉強になった」(後期) など、今後の実習や保育者になったときに生かせる学び・気づきがあったことがわかる。

一方、「良くなかった」の記述例として、「知らない人と話せない」(前期)、「自分勝手な人がいた」(後期)、など、コミュニケーション不足や協力・協調性の欠如などに関する内容が多くみられた。これらは、グループ活動以前の個々の交友関係・人間関係の希薄などの問題を含んでいる。また、「説明不足を感じた」(前期)、「何もしない人が同じ点数とかありえない」(前期)、「やらない人は楽できる授業だった」(後期)、「やる意味がない」(後期)、など、教員側への不審、批判を示した記述例も少なからずあった。

前期のグループ分けは、学籍番号でグループを決めたが、2年次の活動でもあり、全クラス合同やクラス別の他授業もあり、面識が全く無いということは考えられない。しかし、短大は、付属高校から進学した学生が半数近く在籍していることもあり、他高校出身の学生との交友関係が広がりにくい面があるのは否めない。学生の交友関係の現状を考えると、記述例にみられるように「知らない人と話せない」(前期) という記述も理解できる。

前期のグループ活動期間は、後期の1/3である。後期は、学生主体でグループ決めをしているが、前期よりも活動期間が長いので、メンバー同士の関わりが濃密になるため、学生によっては精神的な負担が大きくなる。「集団で4人以上の人数になると仲良くない子と話すことが無理になるから」(前期) の記述例にみられるように、昨今、学生の交友関係をみていると、3、4人であれば、どうにか波風を立てずに人間関係を維持することができる。しかし、それ以上になると、良好な関係が困

難になり、トラブルが発生しやすくなる傾向がみられる。少数で固まる、お互いの不満を面と向かって言うことを避ける、取りあえず、卒業までは波風立てず、良好な関係を維持したい、悪者になるのは嫌、孤立、仲間外れになるのは避けたいということであろう。活動状況を見ていると、活動内で意見を発しない、そのため建設的な話し合いができない上に、積極的に課題に取り組もうという意識が低いと、課題をこなすだけで満足してしまう傾向がみられる。このように興味や関心もない、意欲がもてない状態で活動に臨むため、充実感、達成感も生まれにくい。それが「めんどくさい」「可もなく不可もなく」というような記述になる一因ではないかと考える。学生の中には、保育者資格の取得のみを目指して入学する学生もあり、これらの学生は授業への取り組み姿勢に温度差がみられる。また、意欲や向上心を持って活動に取り組んでいる学生も多数存在していることも事実であるが、中には、意欲のない学生に引っ張られて怠慢になってしまうこともある。どうすれば、メンバー一人ひとりが課題に興味・関心を持ち、協力して、建設的に取り組むことができるようになるのか、具体的な方策が必要である。

さらに、「時間が少なかった。実習前に詰めてほしくなかった」(前期)、「時間詰め過ぎ」(後期)など、活動期間に関する記述例が少なからずあった。前期は後期と比べて1/3の時間で活動に取り組む。しかしながら、この授業は2コマ続きで、活動しやすいのではないと思われるが、学生の活動状況をみると時間を有効的に使って活動しているとは言い難い。これらの要因として、即効で答えが出ないグループ活動への抵抗感、短時間で終わる活動ではないので、面倒くさいなどの中だるみ、集中力が続かない、時間の使い方のイメージが掴めない、意見がまとまらないなど、が考えられる。後期のグループ活動では、活動日誌を記述させているがそれが有効に活用できていない、毎時間の目標設定を課しているが、メンバー同士での共有がなされていないなど、グループ活動の運営に曖昧さが目立つ。これらの問題を解決するためには、前回の振り返りと当日の目標・活動内容をグループのメンバー同士が確認し、共有して取り組めるように、教員の支援体制の再検討を図ることが急務であろう。

記述内容の特徴は、メンバー同士の「協力の有無」の記述が多かったことである。「協力」に関する記述例をみると、協力しないメンバーへの不満などからトラブルに発展することが多々あったことが読み取れる。28・29年前期後期での「良かった」「普通」「良くなかった」に共通して多かった記述例は前述したように「協力」「非協力」である。グループ活動の意義は他の授業での経験からも学生たちは理解しているが、いざグループ活動を開始するとお互いの性格・人柄の確認や探り合いが先行し、活動の具体的な検討に入るのに時間がかかる。「意見も無視された」、「自分の意見が通らない」(後期)などの記述例からも、意見を言うことに躊躇する、自由に意見を言える雰囲気ではない、話し合いが成立しない、メンバーの相互理解が深まらない、その結果、お互いの感情の探り合いで終わっている感は否めない。グループ活動を充実させるためには、メンバーがお互いに忌憚のない意見を述べられる受容的な雰囲気づくりは必要不可欠であり、そのような人的環境づくりを教員側は積極的に支援していくことが求められる。

また、平成28・29年度の数値に大きな変化がみられないのは、学生の気質が類似しているからと考える。平成15～17年でのオペレッタ創作活動の取り組みに関するアンケートをみると、70%の学生が取り組んで良かったと回答している²⁾。昨今、社会の急激な変化に伴い、人間関係が希薄になったと感じる。その要因の一つとして、先行論文にもあげているが、スマートフォンなどの普及が考えられる¹⁾。これは個と個のつながりの希薄さを増大させるものである。幼い頃から、スマートフォンでの生活に慣れ親しんでいると、直接、他者と向き合うことに息苦しさを感じ、人と関わることが煩わしくなる。スマートフォンに依存する生活を送ってきている学生は、集団生活が苦手で、どのように他者と向き合い、言葉を交わし、接すればよいのか、わからず、精神的負担が大きくなる。グループ活動でのスマートフォンの取り扱いの有無は、大きな課題である。

グループ活動に対する学生の記述例から読み取れることは、グループ活動に取り組むには、「協力」、「話し合い」の重要性は感じているが、そこに至るまでの精神的負担が重荷になっていることがわかった。これらの精神的負担を軽減するためには、グループ活動が円滑に運営できるように、個々の学生に目を配り、悩みを抱えている学生の相談に乗る支援体制やグループ毎の進捗状況など、教員間で把握・共有が重要である。さらに、他授業での個々の学生の様子や課題などの情報を収集し、活動支援に生かしていくことも必要である。

(2) グループ活動の際、自らの意見を言うことができたか

「自らの意見を言うこと」に関しては表現活動のグループワークにおける積極性や創意、協調性、創作意欲など、グループの中において、自分がどのような立ち位置でどのように意見を述べ、グループワークに携わっていくかということが理解出来る設問で、最近の学生においては、人に対してのコミュニケーション不足と関わりにおける苦手意識が働く分野で有ということが考察される。

表2 「グループ活動の際、自ら意見を言うことができたか」の結果

項目／平成年・期 (人数)	28年・前期 (104名)	28年・後期 (109名)	29年・前期 (114名)	29年・後期 (109名)
①まったくそうである	34 (33%)	28 (26%)	37 (32%)	25 (23%)
②どちらかというところである	57 (55%)	52 (48%)	58 (50%)	55 (55%)
③そうではない	13 (12%)	39 (36%)	19 (17%)	29 (27%)

表を見ていくと、②の「どちらかというところである」の項目が50%台と一番多く、「どちらかというところ」と記されているように少しばかり積極的に行ったという程度で前向きな意見ではないといえる。

平成28年と平成29年においても共通しているのが③の「そうではない」と①の「まったくそうである」の数値で、通年での活動を通して前期より後期の方の数値が③では増え①では減っていることは指導している教員として残念な結果である。慣れと興味の薄れ、やる気やモチベーションの低下を招

いていると考えられる。如何にやる気を持たせ、1年間を通してのモチベーションを維持させるように熱意を持った具体的な指導ができるか、また、そのための充実したプログラム作成が課題である。

(3) グループ活動の際、全員が情報を共有していたか

「情報共有」に関しては聞く力やリーダーと個々の関係性、協調性、行動力をはじめ、それぞれがグループで話し合い、協調性を持って対応できていたかを問う設問である。

表3 「グループ活動の際、全員が情報を共有できたか」の結果

項目／平成年・期 (人数)	28年・前期 (104名)	28年・後期 (109名)	29年・前期 (114名)	29年・後期 (109名)
①まったくそうである	22 (21%)	16 (15%)	20 (18%)	18 (17%)
②どちらかというところである	53 (51%)	48 (44%)	61 (54%)	52 (48%)
③そうではない	29 (28%)	43 (39%)	33 (29%)	39 (36%)

こちらも②の「どちらかというところである」の項目のパーセンテージが最も高く、両年共前期の数値が高いことがわかる。

この数年、個人個人がグループを構成する上において、それぞれの役割を考え、リーダーを助けようとする協調性が希薄となっており、リーダー任せのグループが多くなっている。「なぜ私たちだけがたいへんな思いをしなければならないのか」というリーダーからの言葉を多く耳にするようになった。台本の製作や衣装などについてもリーダーに一任され、家に持ち帰り作業をするケースもあり、情報共有には程遠い現状がある。

これらの背景には、家庭の経済状況の悪化、所謂貧困家庭の増加がある。学生自身の生活費を得るため、学校が終わるとすぐにアルバイトに行かなければならない学生も多く、彼女らには負担をかけられないために、授業外での活動ができにくいのが現状である。また、家庭の事情があるとはいえ、他の学生に負担を強いる状況をつくっている学生が、「バイトが有るから放課後は活動ができない」と平然と言い切ってしまうため、グループ内での関係性も悪化し、練習や作業が集団ではできない負の連鎖が表現活動を行う上での障壁として重くのしかかってきている。

(4) グループ活動の際、皆と仲良くできたか

この項目は協調性や連帯感、共通認識など、いかに他人と協力しグループのために個人としてではなく1つの舞台を制作していくかの工程に必要な項目である。

表4 「グループ活動の際、みんなと仲良くできたか」の結果

項目／平成年・期（人数）	28年・前期 (104名)	28年・後期 (109名)	29年・前期 (114名)	29年・後期 (109名)
①まったくそうである	32 (31%)	27 (25%)	33 (29%)	26 (24%)
②どちらかというところである	49 (47%)	59 (54%)	60 (53%)	41 (38%)
③そうではない	23 (22%)	23 (21%)	20 (18%)	40 (37%)

この項目については②の「どちらかというところである」において、平成28年度・後期の数値が前期を上回っていることが特徴的で、2年後期の卒業を感じ始めた時期にアンケートを取ったことも有り、このように他に見られない後期のパーセンテージが高い結果となっている。平成29年度生にはない後期の数値の高さは平成28年度の授業進行がうまくいっていたとも考えられる。

次に設問2～4におけるそれぞれ4回の平均値をあげると次のような結果となった。

表5 設問(2)(3)(4)の平均値

(単位：名/%)

	4期の平均値
2-1 まったくそうである	31 (29%)
2-2 どちらかというところである	55 (51%)
2-3 そうではない	25 (24%)
3-1 まったくそうである	19 (18%)
3-2 どちらかというところである	54 (49%)
3-3 そうではない	36 (30%)
4-1 まったくそうである	30 (27%)
4-2 どちらかというところである	52 (48%)
4-3 そうではない	27 (25%)

これらの結果から(3)の「情報の共有」に関しての苦手意識が高いことが窺える。将来、保育者となり現場で縦横のつながりを考えながら働かなくてはならない学生たちにおいてこの項目はたいへん重要である。共通認識を行う習慣を表現活動において実感し、身に付けてもらうためのプログラムであるのだが、その部分が希薄なことは残念である。

アンケートを取るタイミングも考えられるが、記載趣旨から学生たちは無難な答えを選択し、事なかれ主義に傾倒し丸を付けている場合でも、本当に良いと感じているのなら「まったくそうだといえる」に丸をするはずである。

これらの結果から、表現に関して物事を積み上げて良くしていこうとする向上心が希薄になっていることが窺える。自身の持っている価値観のハードル設定が年々低くなり、「ここまでやり遂げたい」という気持ちより「このくらいやっておけばよい」という安易な方向に身を置くことが、集団での身の置き方の安全策とも感じているのであろう。練習時においても何回も繰り返して通し稽古やそ

の部分に極めるという工程を行う学生が少なくなり、1回通しただけで「完璧」などと言い切ってしまう若者たちによる社会性と認識は上下二極化傾向にある。

(5) グループ活動の際、相手の意見を受け入れることができたか

グループ活動において「相手の意見を受け入れること」は協調性について重要な事項であり、グループで議論することにおいて時には自分の意見を通すことを諦めたり、他者に意見を合わせる柔軟性を問う設問である。

表6 「グループ活動の際、相手の意見を受け入れることができたか」の結果

項目／平成年・期（人数）	28年・前期 (103名)	28年・後期 (109名)	29年・前期 (114名)	29年・後期 (109名)
①全くそうである	51 (50%)	43 (39%)	65 (57%)	45 (41%)
②どちらかというところである	49 (48%)	60 (55%)	45 (39%)	57 (52%)
③そうではない	3 (3%)	6 (6%)	4 (4%)	7 (6%)

平成28年・平成29年とも前期では①の「全くそうである」の項目が50%台と一番多く、②の「どちらかというところである」は30~50%台で続き、③「そうではない」は10%未満とごく少数である。一方で後期では①と②の割合が逆転し、③は前期より後期がいずれもわずかながら高くなっている。

前期は教員主導で、後期は学生が自主的にグループを形成したことを踏まえれば、普段仲良くしている人たちよりもやや疎遠の人たちの意見を受け入れる傾向がみられる。これは関係の浅い人たちとの衝突を避けようという作用が働いたかもしれない。また①②を合わせた割合は4期いずれも90%を超えており、ほとんどが「自分は他者を受け入れる」と自己分析していると考えられる。一方で設問(2)「自身の意見を言うことができたか」は③「そうではない」が4期中3期で30%を超えたことから「人の意見は聞き入れるのに自分の意見を言えない」割合が一定程度いることが窺える。相手から自分の意見がどのように捉えられるのか不安を持っていると考察され、それを取り除く方がよりグループ活動を充実させることに繋がると思われる。

(6) グループ活動の際、相手の考えを理解しようとしていたか

相手の考えを理解することは、その相手に興味を持っているかどうか、自身の考えと比較し、どのような違いがあるかの分析、相手に対する配慮を問う設問であり、議論を重ねてグループ活動を深化させるために不可欠な要素である。なお、前設問(5)同様、自己分析に繋がるものでもある。

表7 「グループ活動の際、相手の考えを理解しようとしていたか」の結果

項目／平成年・期（人数）	28年・前期 （103名）	28年・後期 （109名）	29年・前期 （114名）	29年・後期 （108名）
①全くそうである	52（50%）	48（44%）	64（56%）	50（46%）
②どちらかというところである	48（47%）	56（51%）	45（39%）	54（50%）
③そうではない	3（3%）	5（5%）	5（5%）	4（4%）

こちら設問（5）とほぼ同じ回答傾向であり、前期は①「全くそうである」が50%台である一方、②「どちらかといえばそうである」が30～40%台で続いた。逆に後期は②が50%台と最多回答であり、①が40%台と前期後期で結果が逆転した。③「そうではない」はいずれも5%以下とごく少数意見だった。あえて設問（5）との傾向の違いを挙げれば①②の割合は前期後期で比較しても拮抗する傾向にあった。

さらに設問（5）と（6）が他の設問と違って①ないし①②合算の割合が突出して高かった。とりわけ設問（5）は設問（2）の裏返しのような内容であるが、大きな違いが出る結果となった。これは他者に対してグループ活動で意見を交わす中では受容している一方、アンケートのような自身の意見を自由に記載する場においては否定的意見も一定現れていることを示している。相手に否定的意見を持っていてもそれを言わずに飲み込んでいる割合が多いことが窺える。

（7）グループ活動は、将来のためには必要であると考えるか

グループ活動の重要性を問う設問であり、得意・苦手があったとしてもそれを重要だと認識し、活動に取り組んでいたかを確認する設問である。設問（8）と連動している。

表8 「グループ活動は将来のためには必要であると考えるか」の結果

項目／平成年・期（人数）	28年・前期 （103名）	28年・後期 （109名）	29年・前期 （110名）	29年・後期 （107名）
①全くそうである	37（36%）	62（57%）	46（40%）	43（39%）
②どちらかというところである	52（50%）	44（40%）	58（51%）	52（48%）
③そうではない	14（14%）	3（3%）	6（5%）	12（11%）

平成28年度については前期から後期にかけて①「全くそうである」が大きく伸びた一方、③「そうではない」が減少し、重要性の認識が高まっていったのに対し、平成29年度については逆の傾向となった。グループ活動が重要である認識を高めるために行っていたことを踏まえれば、平成29年度の進行に反省すべき点があったかもしれない。ただし4期を通して①②を合算した割合は常に80%超であり、グループ活動が重要である認識は一貫して高いといえる。これは（3）「情報共有」について前期から後期にかけて兩年とも否定的な認識が高まったこととは対照的である。「グループ活動は重要で、それにおける大事なことがあるのに上手くいかない」という認識と実際とのギャッ

ブが生まれていると思われる。そのギャップを解消する手立ては何かということ、自身と相手が同時に存在している中でどうすれば解決するか、ということをも自分たちで気付き、経験することも重要性の一つである。

(8) グループ活動は苦手か

表9 「グループ活動は苦手」の結果

(単位：名)

項目/年次	28年・前期	28年・後期	29年・前期	29年・後期
はい	45	44	49	49
いいえ	57	65	65	60
無回答	2	0	0	0

表9の集計結果、全体的には、平成28・29年度の前期・後期の数値には大きな差はみられなかった。苦手意識がある学生（「はい」）は40～44%、苦手意識がない学生（「いいえ」）は54～59%で、苦手意識がない学生の数値がやや高かった。苦手意識のない学生には、具体的な記述は求めていなかったが、「相手の考えを知ることができるので、新たな気づきができるのでよいと思う」、「いろんな意見があるから」(前期)と記述した学生がいた。

苦手意識のある学生の記述例を「他者に関する事柄」と「自己の性格に関する事柄」に分類した結果、「他者に関する事柄」として、多かったのは「参加意欲」に関する項目であった。記述例として、「みんなが一緒になって参加しようと思っている人が少ないから。苦手というよりそのようなことになるから好きではない」、「自分ばかり仕事が増えて、声をかけても周りがやってくれない」(前期)、「やる気のない人をどうしたらやる気にしたらいいかわからない」、「やる気のある人と無い人の差が激しい」(後期)などの記述がみられた。これらの記述例から、参加意欲はあるが、他のメンバーの言動に左右され、課題に取り組めないジレンマが生じているのがみてとれる。個別か集団活動に関わらず、課題に興味・関心を示し、意欲を持って取り組む姿勢に温度差があるのは、授業を通して感じることである。学生一人ひとりに面白そう、やってみたいと思わせるような導入方法や動機付けの工夫はもちろんのこと、教材研究も重要なことである。

毎年、教務部から前期・後期に、全教科に対して学生による授業評価アンケート調査が実施されている。この教科に対する学生の授業評価アンケート結果をみると、「授業のテーマ」や「内容の有意義」、「興味・関心」に関する項目の評価は低い。これらの結果を踏まえて、活動への意欲を高めるために動機付けの工夫や活動の意義・ねらいなど資料をもとに具体的に説明している。しかしながら、授業評価アンケートの結果に変化がみられないのは、こちらの意図することが学生に伝わっていない、理解されていないということ、授業内容が学生の求めるものとずれているのか、学生の能力よりも高いレベル・困難な内容を設定しているのか、検討する必要があるのかもしれない。

その他の記述例として、「しない人を動かすのはしんどいし、本番点数もらっていると思うと腹

が立つ]、「自分はしっかりしているのに他が何もしていないのに同じ点数になるのが嫌です」(前期)と評価に関する記述があった。このような記述例は、(1)「グループ活動に取り組んでどうであったか」にも同様にみられた。個別の活動であれば、その責任や評価は個人に返ってくることになるが、グループ活動では課題の成果に対する評価はグループのメンバー全員に影響してくる。グループ活動を行う度に「評価」基準に関する質問はよくあり、活動に真面目に取り組んでいる学生にとっては、何もしない学生と同じ評価になることに不満を持つのは理解できる。これらの不満を解消するためには、担当教員がグループ活動を小まめに見て回り、個々の学生に取り組んでいる様子を把握し、適宜、励まし、助言すること、グループ内で問題が生じれば、大小に関わらず、検討し解決に当たることが必要であろう。それが学生の意欲を引き出し、活動の充実度を深め、課題の質を高めることにつながると考える。

また、「自己の性格的に関する事柄」として、「人見知り」という理由でグループ活動は苦手という記述が前期に多くみられた。これらは、前期のグループ分けを教員主導で行ったことや前期という時期的な要因が考えられる。記述例として「人見知りなのであまり関わらない人と一緒に何かをするのは少し疲れます」、「自分の意見が言えない」、「人の前で何かを発信するのは苦手です」、「集団で4人以上の人数になると仲良くない子と話すことが無理になるから」(前期)という記述があった。人の前に立つのが苦手、人の前で発言できない、知らない人と関われない、人数が多いと話すことができない、他人の意見の意味を深く読み取れないなど、昨今の若者のコミュニケーション能力の低下、孤立や疎外感などの実態が窺える。これらは、学生との個人面談時においても感じることで、友だち関係について質問すると大体が4、5人で構成し、学籍番号の前後や出身校で組んでいる。苦手意識の根底にあるのは社会・環境の変化に伴う人間関係の希薄化などの要因で、交友関係の狭さ、他者の評価を過剰に意識してしまうこと、自尊心・自己肯定感の低下、多様性への理解不足、スマートフォンへの依存などが考えられる。

スマートフォンへの依存は、深刻である。グループ活動中は、原則、スマートフォンの使用を禁止しているが、授業に関連することは検索の許可を出している。学生の中には、課題を与えると自分で考えようとせず、すぐ、スマートフォンで検索し、答えを求めようとする者もいる。それが不可能であるときは、見本を求めたがる。確かに、初体験の課題に対してはイメージを浮かべて、取り組むことが難しい場合もあるかもしれないが、まずは自分で考えるということを守る傾向がある。グループ活動は創作ということが主活動であるので、何かに頼るのではなく、自分たちで思考し、創って行く「めんどくさい」活動であり、すぐに答えが出ない。グループ活動は目標達成のために、メンバーが自らの考えを発信し、他者の意見に耳を傾け、それらを共有し積み上げていく活動である。保育現場は対人援助職であり、グループ活動の工程で得た体験は他者に寄り添っていくことや円滑な人間関係構築の一助になる。スマートフォンなどの機器を有効に授業に活用している例はたくさんあるが、そのみに頼っていると思考力や創造力、表現力、応用力などが低下し、人間の本質が失われていくのではないかと危惧する。

また、「意欲」に関する記述例として、「面白くない」(前・後期)があり、活動自体に魅力を感じないのか、集団で活動することが煩わしいのか、両方の思いがあるのではないかと思う。活動自体に煩わしさを感じ、今何をしなければいけないのか、なぜこれをやるのか、など、目標・目的を考慮せず、目先の感情に左右され、行動してしまう傾向がみられる。なかには、グループ活動に対して苦手意識を持っているが、集団活動の利点や必要性を感じながら、参加している学生も少なくない。苦手意識の有無に関わらず、集団活動でしか味わうことができない利点や成功体験、充実感、達成感、満足感を実感できる活動内容やメンバー同士が協力しながら、能動的に活動できるような支援体制・環境整備などの構築を具体的に検討し提供できるようにすることが重要である。

(9) グループ活動を充実させるには、どのようなことが必要だと考えるか

「(9) グループ活動を充実させるには、どのようなことが必要だと考えるか」の結果を見ていく。ここでは予めグループ活動に必要なと思われる力、意欲、コミュニケーション、目標、協力・協調性、信頼、計画性、教員の補助、その他(自由記述)という9つの項目を設定し、それぞれ最も必要だと思うものに「◎」を、必要だと思うものに「○」を付ける選択式で、学生の意識を探った。結果は(表10)のようになった。(事例①平成28年前期、事例②平成28年後期、事例③平成29年前期、事例④平成29年後期を示す)

表10 「グループ活動を充実させるには、どのようなことが必要だと考えるか」の結果

(単位：名)

項目	事例① (104名)		事例② (109名)		事例③ (114名)		事例④ (109名)	
	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○
意欲	16	15	13	18	14	17	10	20
コミュ	19	19	22	16	19	20	24	19
目標	1	2	1	4	1	2	1	5
協力等	27	18	33	17	43	25	45	24
信頼	1	1	0	2	4	6	0	3
計画	2	9	7	13	12	21	8	17
教補	0	2	0	6	1	3	1	1
無回答	38		33		20		20	
その他	自由記述		自由記述		自由記述		自由記述	

これを見ると①の事例では「最も必要だと思うもの」として、協力・協調性(27名：25%)、コミュニケーション(19名：18%)、意欲(16名：15%)の順で挙げられた。また「必要だと思うもの」についても、この3項目を挙げる学生が多数であった。また、この結果は事例②～④についても同様であり、学生はこれら3つの項目を、グループ活動に必要な力だと感じ取ったと言える。特に協力・協調性は他の項目と比べても、選択する学生が多く、事例④においては約40%の学生が最も必要なものであると挙げている。このことから学生、協力・協調性をグループ活動の重要なファクター

であると捉えていることが分かる。

一方で、全ての事例において、目標や信頼、教員の補助を選択する学生は少なかった。本来であれば、活動の終着点となるための目標を設定し、毎時間それに向かって活動を進めていくことが必要であるが、協力・協調性、コミュニケーションといった他の項目に比べ、目標設定の意識が希薄であったと言える。信頼も同様に優先順位が低く認識されているのであろう。また、教員の補助に対しては、グループ運営は、グループ内で解決すべきであり、教員を含めたグループ以外の第三者が補助をする必要はないと考えた結果であろう。これについては、学生の自立心の表れともとれるが、実際に活動の様子を見てみると、こちらにアドバイスや補助を要求する学生も多く見られるので、あくまでも他の項目と比べた場合の、優先順位の低さが結果として出たのではないだろうか。

次に「グループ活動を充実させるために、リーダーにはどのようなことが必要だと考えるか」という問いについて見ていく。ここでも、意欲、コミュニケーション、統率力、計画性、ポジティブな性格、というグループをまとめるリーダーとして必要だと思われる5つの資質を予め想定し、それに加えその他（自由記述）の欄を設けた。選択方法としては設問9と同様に「◎」、「○」を記入する方法をとった。

その結果、表11のようになった。

表11 「グループ活動を充実させるためにリーダーにはどのようなことが必要だと考えるか」の結果
(単位：名)

項目	事例① (104名)		事例② (109名)		事例③ (114名)		事例④ (109名)	
	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○
意欲	12	10	10	7	19	14	7	20
コミュ	22	14	18	20	15	26	15	25
統率	15	12	26	7	29	15	25	13
計画	8	17	14	27	23	24	28	19
ポジ	3	7	4	11	4	11	12	10
無回答	44		37		24		22	
その他	自由記述		自由記述		自由記述		自由記述	

事例①において「最も必要だと思うもの」については、コミュニケーション(22名:21%)、統率力(15名:14%)、意欲(12名:11%)の順に多かった。また「必要だと思うもの」については計画(17名:16%)を選択した学生が最も多かった。事例②では、「最も必要だと思うもの」に統率力(26名:23%)を挙げる学生が最多であり、続いて、コミュニケーション(18名:16%)、計画性(14名:12%)の順であった。ただ、「必要だと思うもの」については事例①と同様に計画性が最も多かった。この計画性については事例③で「最も必要だと思うもの」として統率力に次いで、挙げられており、事例④にいたっては「最も必要だと思うもの」に計画性を選択した学生が最多であった。このことから、学生はコミュニケーション、統率力といった対人的な資質を備える必要があると考えると同時に、計画的に物事を進めていくことのできる資質を、リーダーに求めていることが分かる。一方

で自由記述には「リーダーは必要ない」や「リーダーという役割があるのでリーダー任せになる」といった意見もあった。教員側はリーダーを擁立することでグループが統率されると考えていたが、学生の中にはリーダーの存在に頼るものも少なからずおり、それがリーダーの負担の増加、そしてグループの志気の低下にまで繋がっていたように見えた。

次に設問（11）の「グループ活動を充実させるために、リーダー以外のメンバーには、どのようなことが必要だと考えるか」という問いについて見ていく。調査方法は設問（10）、設問（11）と同様であり、選択項目は意欲、コミュニケーション、協力・協調性、信頼、その他の5項目を設定した。その結果、表12のようになった。

表12 「グループ活動を充実させるために、メンバーはどのようなことが必要だと考えるか」の結果
(単位：名)

項目	事例① (104名)		事例② (109名)		事例③ (114名)		事例④ (109名)	
	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○
意欲	17	22	17	31	15	47	11	42
コミュ	10	13	8	12	11	19	10	22
協力等	29	20	44	21	64	19	66	19
信頼	3	4	3	8	3	8	4	8
無回答	45		37		21		18	
その他	自由記述		自由記述		自由記述		自由記述	

結果を見ていくと、「最も必要だと思うもの」については、全ての事例において、協力・協調性、意欲、コミュニケーション、信頼の順となった。中でも、最多であった協力・協調性は次点であった意欲に大差をつけており、学生が一人ひとりのメンバーにこの資質が必要だと、強く認識していることが分かる。また、協力・協調性については、グループ活動を充実させるために必要なことを問う「設問（9）」においても全事例で「最も必要だと思うもの」に挙げられていた。このことから、グループ活動を行ってきた学生は、メンバーが互いに協力し、協調しながら活動をおこなうことが、グループ活動の充実には不可欠なものであると考えていると言える。

また協力・協調性の次に多かったのは意欲であるが、これはグループ全体の志気に関わってくる部分であろう。例えば意欲の高い学生がメンバーに多いグループは、それぞれが自分の役割を分かっているため、リーダーが促さなくとも、自ら考えて行動することが出来る。その結果、リーダーの負担が軽減されるだけでなく、計画的に活動を行うことができ、結果として、発表のクオリティの向上へと繋がる。一方で、意欲の低い学生がグループ内にいると、計画通りに運営することが困難なため、他のメンバーへの負担が増えることとなり、必然的に発表のクオリティが低下してしまう。実際のグループ活動を見ても、意欲の低い学生がいるグループは、リーダーの負担が増えるだけでなく、各メンバーの不満も誘発していた。このように、学生の活動に対する意欲は、グループ内の雰囲気左右する大きな要因である。

4 全体項目の集計・考察を通して

今回の調査結果から、学生がグループ活動に対してどのような意識を持って取り組んでいるのか、知ることができた。それとともに様々な課題が明確になった。中でも、グループ活動は必要であると認識しているが、活動中に生じるトラブルが嫌で、グループ活動に対して嫌悪感を抱いている学生が多くいることがわかった。

(1)の集計結果は、平成29年度・前期の「普通」数値が他期と比較して約10%高かった点を除けば、平成28・29年度の前期・後期の4期の数値に大きな差がみられなかった。そして、取り組んで「良かった」と「良くなかった」の数値を比較すると、「良かった」の方が、約6、7%と僅かであるが高かったが、「普通」の記述内容を「否定的」「肯定的」に分類した結果、「否定的」な記述例が約80、90%と多かったことから多様な困難を抱えながら、活動に取り組んだことがわかる。

表13 (2)(3)(4)(5)(6)(7)の集計結果

(単位：名)

平成年度・期 項目	28年・前期			28年・後期			29年・前期			29年・後期		
	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③
(2) 意見	34	57	13	28	52	39	37	58	19	25	55	29
(3) 共有	22	53	29	16	48	43	20	61	33	18	52	39
(4) 仲良く	32	49	23	27	59	23	33	60	20	26	41	40
(5) 相手の意見	51	49	3	43	60	6	65	45	4	45	57	7
(6) 理解	52	48	3	48	56	5	64	45	5	50	54	4
(7) 将来	37	52	14	62	44	3	46	58	6	43	52	12

(①全くそうである、②どちらかというところである、③そうではない、を示す)

表13は、(2)～(7)の集計結果を一覧表にしたものである。4期の数値分布は、平成28年後期の(7)以外は類似している。(1)の集計結果と同様に、平成28・29年前期(5)(6)以外は、「どちらかというところである」の項目の数値が高かったのは、明確な判断がしにくいという要因があるからであろう。これは、(1)の回答結果も同じ傾向がみられた。(1)～(7)の集計結果から、グループ活動への取り組みに対して、自己と他者に対する意識に差があることがわかった。

前期のグループ決めは教員主導で決め、後期は学生主体で行ったが、平成28・29年前期より後期の方が自らの意見を言うことができなかつた、情報の共有ができなかつた、などの数値が高かつた。また、前期の方が、相手の意見を受け入れることができた、相手の考えを理解しようとした、などの数値が高かつたのは何故だろうか。(5)の項目の考察にもあるように、普段仲の良い相手より、関係の浅い相手との衝突、トラブルを避けた結果のあらわれとも考えられる。しかしながら、普段、仲の良い間柄であるのに、自分の思いを言えないというのは、果たして健全な友だち関係と言える

のであろうか。そのような、表面上だけの関係性では、一旦問題が起こると、お互いへの信頼関係の無さから、仲間割れが起きることもあるのではないだろうか。これらのグループ活動に入る前に、友人同士であっても、率直に自分の思いや考えを発信しなければ、情報の共有もできず、メンバーの信頼関係も築けないため、結果として目標達成に至らないことを伝えているものの、現状では学生の意識は希薄である。

(3)「情報の共有」に関しては、授業に出席しているものの、活動に消極的である学生や、頻繁に欠席する学生には情報が伝わらないケースや、グループ内で小グループができ、そのため全員が情報の共有ができないことが、情報共有されない要因として考えられる。また、グループのメンバー同士が活動に関する情報を共有できるように、後期に活動日誌を書かせているが、それが有効に生かしていないことが今回の調査結果からも窺える。情報の共有ができない要因の根底には、コミュニケーション不足があると考えられる。コミュニケーションを円滑にしていくには、各自が自分の意見を言える雰囲気づくりが必要であるが、グループの雰囲気作りは、グループ活動を開始する初期段階が非常に重要である。なぜなら、この段階で学生たちは、それぞれの役割を決め、お互いの人柄を観察しながら、関係を築いていくが、築かれた関係や雰囲気は活動終了時まで続いていく可能性が高い。グループ活動の運営を円滑に進めるためには、この初期段階で教員側がファシリテーターとしての役割を担うことも必要である。

前述しているが、(5)(6)の項目「相手の意見を受け入れた」、「理解した」という数値が高いが、この点については疑問である。(1)の記述例に、グループ活動の際、「自分の意見が通らない」(後期)、などの記述が少なからず、あったことから、自分は他者の意見を受け入れた、理解したと解釈しているが、現状はそうではなかったということであろう。

(7)「将来のために必要か」については、平成28年後期の「全くそうである」の数値が最も高く、全体的には、グループ活動は、将来のために役立つこと、必要であると認識していることがわかり、この結果から、学生が活動のねらいや意義を理解していることが確認できた。

(8)「グループ活動は苦手か」の結果は、「苦手ではない」の数値が約10%高かった。「苦手である」の記述例の多くはグループ内のトラブルで、その要因は参加意欲の有無である。また、他の「苦手である」の理由として、自己の性格に関する「人見知り」という記述例も少なくなかった。「苦手意識」の要因として、社会変化に伴う人間関係の希薄化やスマートフォンなどの機器による影響が考えられる。苦手意識を持っている学生には、苦手の要因が軽減できるような方策を考えるなど、調査結果を再度、探求していくことも必要である。

(9)(10)(11)の調査結果から、グループ活動を充実させるには、「協力・協調性」、「コミュニケーション」、「意欲」が必要であり、リーダーには「コミュニケーション」、「統率力」、「意欲」が、メンバーには「協力・協調性」、「意欲」、「コミュニケーション」が必要であると確認できた。グループ活動を充実させるにはメンバー同士のコミュニケーションが必要であると学生は認識している。しかしながら、コミュニケーションが取れない、意見を発信できないなど、対人的な資質を改善できるよ

うな方策に取り組むことが近々の課題であろう。グループ活動にはトラブルは付きものであるが、それをプラスに変えることができる受容的雰囲気づくりも必要であり、困難を回避しての活動の充実は考えられない。

学生が充実したグループ活動を行うには、どのような支援や対策が必要であるか、今回の調査結果をもとにして、具体的に考えていきたい。

5 充実したグループ活動を行うための提案（対策）

平成28年度先行論文では、グループ活動を充実させるための提案を、グループ運営に視点を当てて述べた¹⁾。その一つとして、コミュニケーション不足の解消として、アイスブレイキングのためのグループアクティビティの時間を設ける。これらの活動は、他授業でも、以前からグループワークを取り入れているのを見聞きしているし、この教科の個別授業においても、小グループを組んだ活動を取り入れている。しかしながら、学生が気軽にゲーム感覚で参加できるグループワークは少ないのではないかと思われる。他授業でも、グループ活動が十分に機能しないということをしばしば耳にするが、レクリエーション的な教科を取り入れて、他者と自然にふれ合う機会を設け、コミュニケーションを深める場の提供が必要である。そして、他授業でのグループ活動に関するグループ分けの方法・内容、学生の状況など、情報を共有し、個々の学生の支援に生かすこともグループ活動の充実度を高める一助になる。

他の提案として、時間の有効利用については、綿密な計画と目標設定が可能なワークシートの活用について述べている。目標設定のワークシートは、平成29年度・後期に取り入れたが、学生や教員間で周知徹底されず、有効に活用できなかった。この授業は、2コマ続きなので、意欲・集中力の持続ができず、時間の有効な使い方という点では難しい。学生が有効に時間を使い、目標に沿った活動の計画を立て、それらを実践できるようにシミュレーションし、具体的に進めていけるような援助が必要である。これまでの活動状況を振り返ると、日々の活動日誌の記入を課しているが、記入者のみが内容を把握し、他のメンバーは何が書かれているのか、知らないことが少なくない。グループ内でメンバー一人ひとりが、毎時間の目標と活動内容を共有し、協力して取り組むことができるように、目標設定や活動内容の確認ができる時間を設けることも重要である。

グループ活動を充実させるには、自ら意見を発信する、他者の意見を否定せず、まずは受け入れる受容的な環境づくり、情報の共有、目的意識を持ち、自分の役割に責任を持ちながら、協力して、目標を達成していくことが不可欠である。これらが円滑に実践できるように、教員は各グループの進捗状況や何か問題が起きていないか、など、こまめに各グループを回り、教員間でグループ状況を共有し、適切な援助ができるようにすることが必要であろう。そして、活動終了後の総括の仕方を考える必要がある。作品発表後に、学生に振り返りとして自・他班評価を行わせているが、それが気づきを深めることにつながっているのか、検証してみる必要がある。

本調査の結果及び、先行論文の提案を再度、教員同士で共有・検討し、具体的な方策を考えていくことが求められる。

6 まとめ

今回の調査を通して、学生のグループ活動に対する意識を確認することができた。グループ活動の弊害を取り除き、充実した活動ができるように、学生が置かれている現状を把握して、対策を検討することが求められる。そして、グループ活動についての肯定的な意見を再度、汲み取り、これらを否定的に捉えている学生の支援に役立てることも重要なことである。

また、保育者は対人援助職であり、子どものクラス運営は重要な職務であることを考えると、グループ活動を通して、他者との関わり方や、目標を達成する過程を体験することは重要である。学生を画一的に捉えず、授業内外での触れ合いや言動で感じたことを学生の支援に結びつけていくことも必要ではないかと考える。

学生の多くが、グループ活動の必要性や重要性を認識していることが確認できたので、グループ活動の体験を通して、マイナス感情でなく、満足感・充実感などプラス感情が味わえるような支援体制を考えていきたい。

参考文献

- 1) 魚住美智子, 村上佑介. オペレッタ創作活動におけるグループ活動について. 大阪城南女子短期大学研究紀要. 第51巻 (2017) p31-42.
- 2) 魚住美智子, 林和美, 田中千恵. オペレッタ創作活動による表現力の育成と保育への応用Ⅲ. 大阪城南女子短期大学研究紀要. 第41巻 (2007) p50-51.

(うおずみ みちこ：教授)

(むらかみ ゆうすけ：講師)

(ゆい ひろたか：教授)

(やまだ ちさと：准教授)